第４節　天野川の変遷

１．はじめに

天野川は淀川の支川の一つである。大阪府四條畷市田原付近を源として、生駒谷を北流したのち、生駒山地を磐船峡で越えて、多くの支川を合わせながら交野・枚方市域を東北に流れ、枚方市の磯島南方で淀川に合流している。流域面積は 49.6 ㎢を測り、周囲を丘陵や山地で形成された小宇宙をなし、都市化が進むまでは大阪近郊の農村地域として変化に富んだ景観を残してきた。

上の山遺跡は天野川中流部の左岸に位置し、１・２区の発掘調査によって天野川氾濫原における中世以降の堆積状況が確認された。そこで、本稿では近代以前における天野川の変遷と流域の耕地開発について検討を加えてみたい。なお、考察の対象は磐船峡より下流に限ることとする。

２．谷底平野の微地形と旧流路　（図 139）

本川・支川を含めた天野川水系は、西は枚方丘陵、東と南西は交野台地、東南は生駒山地西斜面に及ぶ逆ロート形を呈している。天野川本川は磐船峡の出口から淀川との合流地点まで延長 6.5㎞、幅 0.5㎞のほぼ直線的に延びる谷底平野を伴っている。この谷底平野は河川の侵蝕に加え、断層による落ち込みによっても形成され、河口部で標高約８ｍ、磐船峡の出口で約 33 ｍを測り、3.8/1,000 ｍの平均勾配をもつ。なお、茄子作と村野を結んだ線より下流側（主に枚方市域）では段丘面との比高が大きく一種の地峡状をなすのに対し、上流側（主に交野市域）では氾濫原の堆積物が段丘面を覆っている場所も認められる。これは生駒山地の西側が構造的に沈降しているためであり、交野市の平野部が全体的に小盆地状を呈していることとも関連している。背後の生駒山地は花崗岩類でできており、風化したマサ土は流出し易く、天野川本川を含めそこを水源とする前川、北川、小久保川、妙見川等の支川はいずれも天井川化する。このため、谷底平野に流れ出た支川はそこで曲がって長い距離を本川に伴走する。

谷底平野には旧流路を窺わせる地形的な痕跡を認めることができる。

まず、河口部付近には淀川の蛇行とその後退によって生じた三日月形の新旧２列の自然堤防が認められる。この自然堤防上には近世初頭に文禄堤（1596 年）が築かれ、その上面が京街道となって宿場が発展したことが枚方宿遺跡の発掘調査によって明らかになった（西田 2000）。また、基盤のシルト層（上面の標高は約 6.2 ｍ）の年代から自然堤防の形成時期は中世後半以降と推定されている。この付近の沖積層基底面の標高は大垣内町で海面下 5.4 ｍ、その北の現河口（磯島）で 1.6 ｍを測る（宮地･田名庄･寒川 2001）ことから、最終氷期の天野川河口は現河道より約 500 ｍ西側の枚方丘陵北端付近にあったものと推定される[1)]。その後、淀川の自然堤防が旧河口を塞ぐ位置に形成されたため、河口は新・旧自然堤防の隙間（現・安居川）か、磯島の北側に移動したと考えられる。なお、現在の河口は近世の淀川左岸堤（文禄堤）が築かれている新期の自然堤防より更に 500 ｍ西側にある。

禁野橋から浜橋まで（下流部）の河道は、標高８～ 11 ｍの谷底平野の東寄りを緩く曲がる。ただし、現河道の走る東側が西側より標高が高く、台地の縁も張り出している（その一つに禁野車塚古墳が築かれる）ことから、河道が人為的に東側に付け替えられた可能性が高い（後述）。なお、西側に広がる幅約 400 ｍの平地には条里型地割（田宮・山之上地区）が良好に残る[2)]。

浜橋付近で河道はＳ字形に湾曲し、その後、茄子作東方の境橋付近まではほぼ直線的になる（中流部）。平野の標高は 13 ～ 19 ｍであるが、この間も河道は標高の高い平野のやや西側に偏り、東側の村野から

私部地先にかけて田宮・山之上地区と同方向の条里型地割が断片的ではあるが認められる。また、両岸の低位段丘崖には旧河道の蛇行によって削られた円弧状の地形が随所に認められ、特に郡津付近に顕著であることも、かつて流路の中心が東寄りにあったことを示す。

東高野街道にかかる境橋付近でやや南に湾曲した後、河道は低位段丘面に沿って直線的に続く（上流部）。平野部の標高は私部集落の西側で約 25m へと上昇しその後やや傾斜を強めることから、扇状地的な堆積環境にあったと考えられる。河道は上の山遺跡の東側から磐船峡の出口付近までは、長さ 1.5 ㎞に渡ってその両側に幅 120 ～ 150 m、比高約５mの砂堆を伴う特異な地形を呈している。この特異地形の形成時期については、その南端部が摂津・河内地震（1510 年）時と推定される交野断層の横ずれを受けていること（東郷 2000）、私市植物園付近で砂堆基底部から採取された木片が 602 ± 59yＢＰの炭素年代を示すことから、鎌倉時代以降～近世初頭に想定されている（東郷・中野・峯元 2002）。また、地下水位の等深線や「河原」などの小字名の分布からも天野川の旧流路は、現在より東に振れていたと推定されている（交野市教育委員会編 1992）。私市には天野川本川の旧河道と考えられる南北に延びる自然堤防が認められる（私市の旧集落はこの上に立地する）。なお、森の南西から北側に広がる山麓の緩斜面には、田宮・山之上及び村野・郡津地区と同方向の条里型地割が広がる。また、私部集落の東方から倉治にかけて段丘面にはこれらと方位を異にする２群条里型地割が残る。

以上のことから、天野川の河道は谷底平野を今日とは反対の側を流れていたことが予想される。現流路に移った時期は境橋より下流部では、条里型地割が施行される下限（おそらく平安時代後期ごろ）であり、上流部でも近世初頭以前、おそらく中世後半頃と推定される。

３．古代・中世の耕地開発

ここでは、主に文献史学の成果に基づき、近世までの耕地開発の歴史を概観する[3)]。

天野川流域に関する文献史料の初見は、『日本書紀』敏達紀６年２月条（577 年）にみえる私部設置の記事である。その場所は地名考証から交野市私部から私市付近の天野川右岸域に比定されている。また、仁徳紀および『古事記』にみえる「茨田屯倉」「茨田三宅」についても、９世紀前葉に成立した『和名抄』の交野郡三宅郷との関係や、「屯田」が転化したと考えられる「官田」の小字をもつ水田群が私部の南方に残ることからその中心を交野市域に求める考えが出されている（上原 2003、網 2005）。このように、６世紀末には天野川上流部の右岸一帯に王権との関わりの深い、耕地経営がなされたことを示唆している。

つづいて、時期は下がるが弘仁 12 年（821 年）交野郡の口分田の収量が低いため「易田」とする旨の太政官符が出されている。交野郡は８世紀初頭に茨田郡より分置され、現在の枚方市から交野市に至る広い領域を有するが、交野郡衙の比定地が郡津にあることから、天野川上流域が中心地域である。更に核となる耕地群は「茨田屯倉」を継承した可能性が高い。

これに対し、天野川下流域を含む淀川左岸に近い地域は、８世紀中葉～９世紀前葉に百済王氏の勢力圏にあったと考えられ、百済寺跡や禁野本町遺跡から推測されるように交野台地西部の拠点を中心に、桓武、嵯峨など百済王氏ゆかりの天皇による交野遊猟が行われたらしい。百済王氏の居館から望むことのできた天野川下流部は、野鳥の群れ飛ぶ低湿地が広がっていたと推測される。なお、『伊勢物語』に惟喬親王に関連して「天の川」の地名が初めて登場するのは 10 世紀初頭であり、この流域に七夕伝承が多いのも交野遊猟の記憶が反影しているのかもしれない。

10 世紀前葉～中葉になると交野市域一帯に石清水八幡宮領荘園が設定され、11 ～ 14 世紀にかけて耕地開発が著しく進んだ様子が窺える。その発端は延喜 18 年（918 年）前交野郡司守部平麻呂が三宅山及び付属田地の領有権を河内国府より取得し、ついで 950 年頃それを八幡宮寺に寄進し、旧領主権を維持したまま八幡宮寺三宅山御山司に任命されたことに始まる。その領域は「三宅山　山地 1400 町、御倉町館院等内地６町、免田 23 町」とされ、津田から星田にいたる生駒山地北辺部西斜面とその山麓部に該当する。その範囲は南北７㎞、東西２㎞を測り、文献上の数値と一致している。なお、交野郡司であった守部氏は 728 年に連姓を賜った鍛冶造であり、その拠点は森付近に想定されている（真鍋 1997）。ここでいう免田 23 町はその直営田で、茨田屯倉に由来する可能性がある。なお、三宅山の領有はそこを水源とする天野川水系にかかわる広大な開拓権を掌中にしたことを意味したと考えられる。

八幡宮領荘園はその後、拡大を続けたらしい。延久の荘園整理令・延久４年（1072 年）の際、交野南条の田地７町７段 180 歩を停止されたことは、山之上村が近世初頭まで南条村と呼ばれたことから、その西端が天野川下流部まで延びていたと考えられる。これを田宮・山之上条里地区に比定することが許されるならば、河道の付け替えと耕地開発がこの頃一体的に行われた根拠になろう。その後、12 世紀後葉になると星田地域に「大交野庄」と呼ばれる三宅山とは異なった荘園も成立する。

一方、時期は遡るが、10 世紀後葉に摂関家（藤原氏）領荘園として楠葉牧が登場し、かつての百済王氏の勢力圏を引き継ぐ形で、次第に淀川に沿って南へと領域を広げていく。仁平元年（1151 年）には河北牧と河南牧に分かれ、河南牧の領域については楠葉御牧南条の田宮竹原郷に春日若宮御供田が設置されていたことと関連して、田宮郷までおよんでいた可能性が指摘されている。田宮は山之上（南条）と接近した位置にあり摂関家領と八幡宮領が競合関係にあったようだ。なお、「禁野」の地名は弘安８年（1285 年）『中務内待日記』の「きんやかた野」が初出であり、1338 年には淀川に興福寺領「禁野関」が設けられる。

このように天野川流域の開発はその下流と上流で異なった歴史的背景を持ちながら進行していったと考えられる。

やがて、15 世紀になると八幡宮領荘園は外的には寺院・武家勢力による蚕食、内的には八幡宮神人の悪党化（独立化）によって衰退を迎える。応永７年（1400 年）には菅新左右衛門尉久範という武士が交野郡内の八幡宮領荘園 87 町の内、50 町を自己の「新開」に混入させ横領するという事件が起こる。この記事は中世後期における八幡宮領の広がりを示すものであるが、名目的に続いた八幡宮と有力農民との関係は豊臣政権の登場で消滅し、近世村落による領域支配へと移行することになる。1594 年の文禄検地時にすでに天野川水系の村々が出そろっており、その経済的基盤としての耕地化が相当程度進んでいたとみられる。

４．近世文書に見える天野川関連記事　（図 140）

近世の天野川流域の村々は、河口付近が河内国茨田郡と摂津国三島郡に含まれるほかは、河内国交野郡に属していた。河口付近では左岸が岡新町村と三矢村、右岸が磯島村となる。磯島村は 1902 ～ 1903 年（明治 35 ～ 36 年）の磯島築堤以前には淀川の中洲にあり、1874 年（明治７年）までは摂津国三島郡に含まれていた。下流部に禁野村、田宮村、山之上村、中流部に村野村、郡津村、さらに上流部に私部村、茄子作村、私市村、星田村が位置していた。この内、禁野村、村野村、私部村では河道を挟んで村域が広がっているのに対し、その他は河道が村境となっている。なお、現在、郡津、私部、私市、星

田各村が交野市域、他は枚方市域に属している。

村々に残された近世文書には、水稲農耕を営む上で関わりの深い天野川に関する記事が数多く見いだせる。そこで、『枚方市史』第３巻（枚方市史編纂委員会 1977）および『交野町史』改訂増補第１・２巻（片山編 1970、1971。この文献は片山編 1963 の改訂版で、以下『増補交野町史』と略記）などから該当する記述を抜き出し、時間順に並べ、その場所等の評価を加えていきたい。

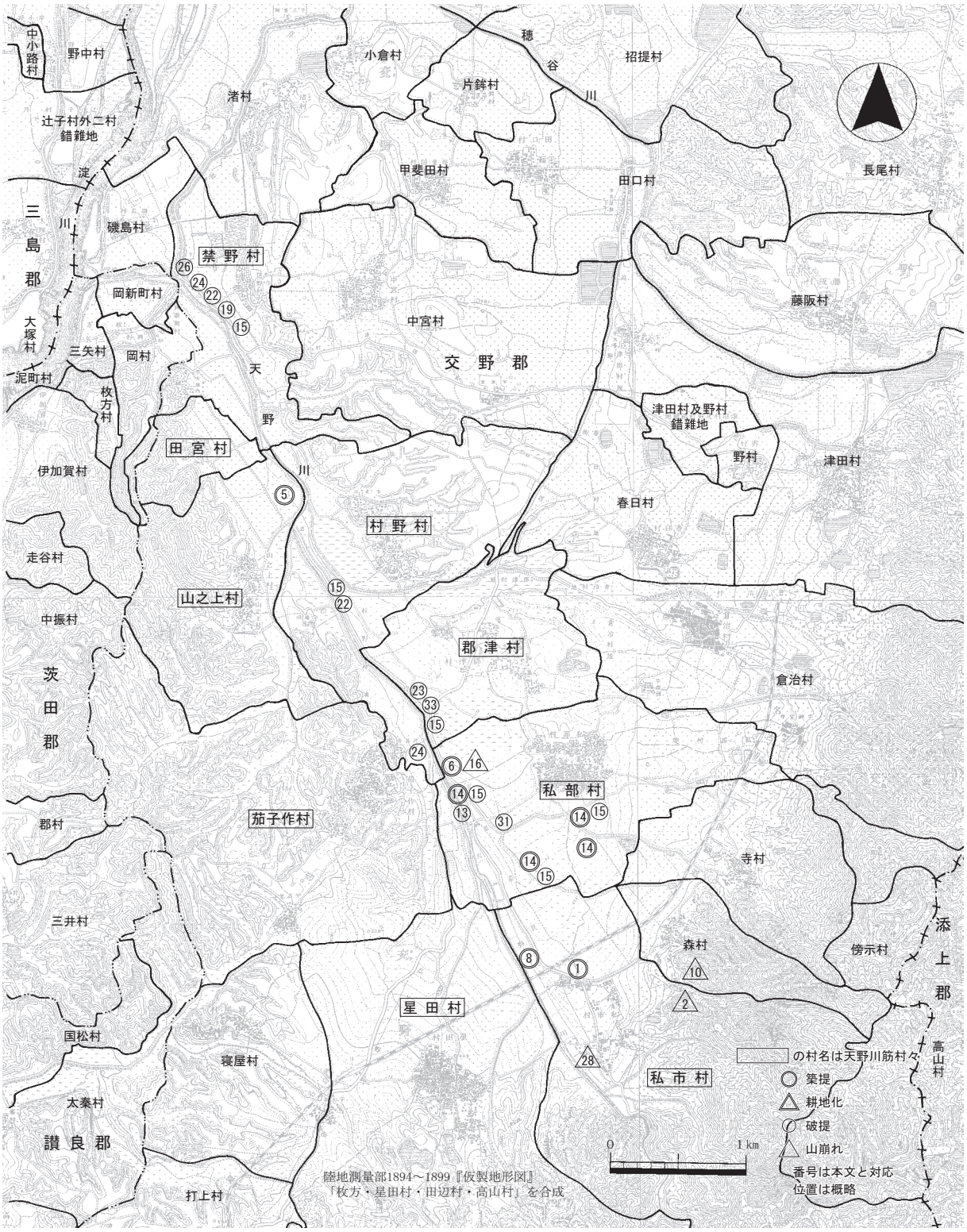

図 140　明治初年の村域と近世の関連記事

【１】1591 年（天正 19 年）私市、大雨で堤切れ「かわなべ」田が砂入り。1595 年（文禄４年）この砂を盛り上げ、「小くぼ川」の高堤を築く。(『増補交野町史』１巻 p359)

【１】「かわなべ」田の位置は不明であるが、天野川上流部での破堤と、天野川本川の位置を推定する上で関わりの深い小久保川の築堤記事である。なお、この数年後の 1596 年（文禄元年）には文禄畿内大地震が発生している。

【２】1624 年頃（寛永の初め）天田の宮の上流、森と私市の山麓に激しい山崩れ。森の田 170 余石に砂入り。(『増補交野町史』１巻 p340)

前述の地震が影響しているかは不明であるが、【２】のような山崩れに由来するらしい砂礫層が倉治から星田地域の発掘調査で中世耕作層の上面から検出されている（交野市教育委員会編 1997 など)。

【３】1639 年（寛永 16 年）村野村と茄子作村、天野川からの取水を巡って争論。(「寛永 16 年訴状」『枚方市史』３巻 p150)

【４】1665 年（寛文５年）８月　天野川流域５ヶ村（私部・郡津・村野・山之上・禁野）が、年々土砂の流出が激しく、田畑が被害を受けることから、天野川を普請所に指定し幕府で経費の負担するよう求める願書を提出。(『枚方市史』３巻 p176)

【５】1674 ～ 75 年（延宝２～３年）山之上村が新堤を設置したため、村野村堤に水当たりが強まり争論となる。(『枚方市史』３巻 p150)

【６】1679 年（延宝７年）私部村が村境の川中にある草島に新堤を設置し､村野村が訴訟を起こす。(「富田甚作文書」『枚方市史』３巻 p150)

【７】1683 年（天和３年）２月 18 日、将軍綱吉が若年寄等に命じて天野川を視察。(『徳川実記』)

【８】1688 ～ 1703 年間（元禄年中）星田村が落野辺水落口から天野川まで 85 間の二重堤を築き、以後、堤敷料として年々米 10 石を私部村に納める。(「北田家文書」『増補交野町史』２巻 p782)

【５】【６】は、藤田川、前川など複数の支流が合流する浜橋付近の築堤記事である。【３】【６】の村野村と私部村が接する場所は、現在の逢合橋（上の山遺跡の北東）付近の狭い範囲であり、ここが治水上のネックとなっていたことを窺わせる。【６】は中洲の存在を示し､流路が枝分れしていたことを示す。【８】は先に述べた特異な砂堆の東斜面を指している。

【９】1689 年（元禄２年）２月 11 日の貝原益軒､「獅子窟山より天川を」望む。(貝原益軒『南遊紀行』)「獅子窟山より天川を見おろせば、其川東西に直にながれ、砂川にて水少なく、其川原白く、ひろく、長くして、恰天上の銀河の形の如し。扨こそ此川を、天の川とは名付たれ。」

【９】は、交野山地の中腹から天野川を眺望した印象とされ、川名の由来を示す景観としてよく引用される。しかし、この段階は天野川の乱流状態ではなく、直線的に続く特異な砂堆を描写した可能性もある。

【10】1704 年（宝永元年）夏大雨のため大洪水大山崩れのため、森の田地 170 石に砂入り。(「向井直一所蔵文書」『増補交野町史』２巻 p784)

【11】1729 年（享保 14 年）夏大雨、森、私部堤切れ多し。(「向井直一所蔵文書」『増補交野町史』２巻 p785)

【12】1732 ～ 1737 年（享保 17 ～元文２年）村野村で樋伏替普請が集中（「富田家文書」『枚方市史』３巻 p179)

【13】1753 年（宝暦３年）６月３日、私部村で天ノ川決壊（『枚方市史』３巻 p415)

【14】1755 年（宝暦５年）私部この年より毎年冬、天野川、北の川、宮の前川、草川、とんこ川（南川）の堤のかさ上げと腹付けを行う。（「原田英二所蔵文書」『増補交野町史』２巻 p16、p787）

【15】1756 年（宝暦６年）９月 16 日、郡津、大雨洪水で堤切れ、年貢減免（『増補交野町史』１巻 p297）村々川（宮ノ前、草川、天ノ川、北ノ川）堤切れ多し（「原田英二所蔵記録」『増補交野町史』２巻 p18、p787）私部、夏の大雨で最もひどい堤切れ。（『増補交野町史』１巻 p394）天ノ川村野堤・禁野堤決壊数知れず。50 年来の大洪水。（『大阪府誌』第４輯『枚方市史』３巻 p415）

【16】1757 年（宝暦７年）私部　天野川の中洲を開いて畑地とする。（「北田騰造所蔵文書」『増補交野町史』２巻 p787）

【17】1757 年（宝暦７年）私部　大規模な堤修復（『増補交野町史』１巻 p394）

【18】1758 年（宝暦８年）２月、天野川筋９ヶ村（私市、星田、私部、郡津、茄子作、村野、山ノ上、田宮、禁野）が共同管理を申し合わせ。（「天野川筋九ヶ村申合一札」『枚方市史』３巻 p163）

【10】は山崩れによって流失した土砂が山麓の田を埋める状況である。樹木の伐採による禿げ山化が進んでいたと考えられる。洪水による破堤記事の内【11】【13】が私部で発生し、【15】が郡津を含め村野から禁野にかけて大規模に生じているが、この一例を除けば茄子作と郡津を結ぶ線より上流側で破堤が頻発していることが読み取れる。それに対し【14】【16】は私部内での本川・支川堤のかさ上げ記事である。【12】は村野村で取水施設の改良が盛んに行われたことを示す。【18】は天野川に利害関係を持つ村々の間で水利に関する調整機構が成立したことを物語るが、【15】など流域全体に及ぶ洪水の発生もその契機となったのであろう。

【19】1765 年（明和２年）４月 16 日　天ノ川禁野堤決壊。（『枚方市史』３巻 p416）

【20】1769 年（明和６年）大雨で洪水堤切れ、砂入り多し。（「加地章所蔵文書」『増補交野町史』２巻 p788）

【21】1798 年（寛政 10 年）「天川」交野郡（『河内鑑名所記』）

【22】1775 年（安永４年）５月５日、天の川は枚方で禁野へ切れ、村野村でも決壊、麦種稲に被害。（『枚方市史』３巻 p416）

【23】1786 年（天明６年）６月 13 日、郡津　大雨で堤切れ砂入り多く、年貢減免。（『増補交野町史』１巻 p297）交野の村内の川、ところどころ堤切れ多し（「中野実所蔵記録」『増補交野町史』２巻 p789）。星田村から枚方まで切所７ヶ所切。茄子作村から枚方まで天の川西分田地に砂入り。（「津田小崎伝一所蔵文書」『増補交野町史』２巻ｐ６）（『枚方市史』３巻 p417）

【24】1791 年（寛政３年）６月 19 日、天ノ川、茄子作村・禁野村にて２ヶ所決壊。（『枚方市史』３巻 p418 近世Ⅷ）

【25】1801 年（享和元年）「天川」（『河内名所図会』巻６）

【26】1808 年（文化５年）６月 22 日　天ノ川禁野村へ切込む。（『枚方市史』３巻 p418 近世Ⅷ）

場所を特定できるものの内【19】【22】【24】【26】は禁野、【22】は村野での破堤記事である。【23】の破堤が右岸で起こっているのは郡津のみで、左岸では茄子作より下流の被害が大きい。【24】は【３】【６】と同じ場所を指すのであろう。

【27】1812 年（文化９年）私市村、天野川荒地開発につき御領方私領方の間に争い。（「松井幸治家所蔵文書」『増補交野町史』２巻 p792）

【28】1841 年（天保 12 年）私市村西河原などの大開墾。（「松井幸治所蔵記録」『増補交野町史』２巻

p795）

【29】1843 年（天保 14 年）私部村、天野川堤に芝植え付け所々。その人夫 620 人（「原田家記録」『増補交野町史』２巻 p796）

【27】【28】は谷底平野で最後の残った部分の開発を物語る。【29】は堤防整備の一方法を示している。

【30】1848 年（嘉永元年）８月 10 ～ 14 日　枚方辺り天の川水溢れ往来ならず、古今無双の水害 （「近来年代記」４『枚方市史』３巻 p419）

【31】1849 年（嘉永２年）私部付近の前川が増水決壊。（嘉永２年８月 12 日『澱川流域水害図』）

【32】1866 年（慶応２年）大雨大洪水川々堤切れあり。（「町誌編纂会所蔵文書」『増補交野町史』２巻 p798）

【33】1868 年（明治元年）５月 13 ～ 14 日？洪水。天ノ川、郡津の西、高橋（東高野街道）下流で右岸決壊し田に砂入り。この砂を集めたものが「松塚」。また堤に松を植樹し並木とする（『増補交野町史』２巻 p76、798）

【30】～【33】は幕末～明治初の破堤記事である。【31】は私部において天井川化が支川でも進んでいたことを示す。【33】は明治元年の右岸における大規模な破堤記事である。松塚はもと９ヶ所あり郡津駅西側の公園内に４ヶ所残り、老松が茂っている。その後、破堤記事は 1885 年（明治 18 年）および 1917 年（大正６年）に河口部で淀川決壊に伴って発生したものを除いて見られなくなる。

５．近世以降の天野川流路と耕地開発

近世期における天野川の流路の状況と天井川化の過程および谷底平野における耕地開発のありかたについて、６段階にわけて述べることとする。

（１）16 世紀末～ 17 世紀

河口の位置は、現在と同じかやや西の自然堤防列の隙間にあったようだが、詳細は不明である。なお、淀川流芯は現在よりも東にあり、現左岸堤の間際まで迫っていたと推定される。中流部では藤田川・前川合流点付近で新堤の築造が行われ、私部付近でも中洲に堤防が築かれている。上流部においても 16 世紀末には天野川の旧流路を遮断するように小久保川の高堤が構築されたことから、現流路が既に定まっていたと考えられる。盛んな築堤工事は流路の固定化によって新たな可耕地を生み出したが、反面天井川化を促す要因となっていく。なお、この時期の開拓地を示すと考えられる「新田」の小字は村野の東部に分布している[4)]。また、堤防は磐船街道としても利用された。この段階の耕地開拓は近世前期における全国的な新田開発の流れを受けたものであろう。

（２）17 世紀末～ 18 世紀前半

破堤記事が増えるが、その場所は森、私部など天野川の中～上流域の右岸に集中している。これは、上流域がより早く天井川化が進み河床が上昇したためであろう。それに対応した築堤工事も数多くみられる。新たな築堤は堤内地（後背地）の土砂の移動を防げ、水平化を促したようだ。なお、1758 年に流域９ヶ村により水利調整が行われたことは、天野川の治水が流域全体の問題となる程度に開発が進行したことを物語っている。

（３）18 世紀後半～ 19 世紀初頭

破堤記事は相次ぐが、その場所が村野、禁野などより下流域へと移行した段階である。これは、天井川化が下流域にもおよんだためで、その背景として交野山から妙見山にかけての禿げ山化（千葉 1991）

と、中流域での堤防のかさ上げによって、土砂の下流部への運搬が促進された結果であろう。禁野付近では少なくともこの時期までに排水を滑らかにするため、現河口部が広げられ、固定されたと推測される。しかし、新たな築堤や樋の設置などの記事はみられず、全体として開拓行為が停滞した時期であったと考えられる。

（４）19 世紀前葉

私市の「西河原」など最後まで残った場所が開拓され､流域全域の耕地化が完了を迎える段階である。私部では堤に芝を貼るなど養生に努めており、天井川化が収束に向かいつつあったのかもしれない。なお、私部西部から村野・郡津、山之上にかけて天野川左岸に帯状に分布する「河原」の小字をもつ水田は、砂地で水掛かりがやや悪い自然堤防沿いに分布し、この時期の開拓地を物語るかもしれない。

（５）19 世紀中葉以降

1848 年の大洪水に始まり幕末～明治初期にかけて再び洪水が頻発している。中流域の破堤では大量の土砂が流れ出し、それを盛り上げた松塚が築かれ、堤防には松並木が植えられるなど、都市化以前の旧景観がほぼこの時期に出来上がる。洪水の発生は気候変化も影響したとみられる。土砂の流出は比較的平衡状態を保っていた天井川が崩壊しつつある状況ともいえよう。

（６）19 世紀後葉～ 20 世紀

近代的治水技術が導入され、大阪府が主体となった治水工事が進められた段階である（建設省近畿地建 1974)。その内容は河床の切り下げと堤防の補強、洗堰の設置にあり、背後の山地でも植林と砂防工事が行われた（大阪府立狭山池博物館 2005)。この段階は、農業用水としての利用が重視された明治から昭和中期までと、都市化を前提とした河川工事が行われた昭和中期以降に分けられる。特に 1960 年代に進められた後者は、河道の大規模な拡幅や谷底平野の埋め立てを伴っており、それまでの文化的景観を一変させるものであった。

６．おわりに

以上の成果に基づき、天野川の変遷と谷底平野の耕地開発について明らかになったことをまとめる。

まず、平安時代中期までは天野川河口から下流部一帯は低湿地が広がり、水田は段丘裾部や開析谷を除いてほとんど行われなかったと考えられる。それに対し現在交野市域となっている上流部では、谷底平野に面した低位段丘面において６世紀後半にはかなり耕地化が進んでいたとみられる。平安時代後期になると下～中流部では流路を移し、後背地に条里型地割りが敷かれた可能性が高く、上流部でも荘園化を契機として谷底平野や扇状地・段丘面まで開拓が進んだようである。こうして、中世後期までの上流域の状況は不明であるが、ほぼ現在の流路が定まっていたと考えられる。

近世は谷底平野の既にある耕地を洪水から守り、また新田開発を目的に、大がかりな築堤によって流路の固定化が計られたが、結果として天井川化を進行させた時期といえる。天井川化は中～上流部からはじまり、次第に下流部にもおよんだことが破堤場所の変化から推測された。また、新田開発は 17 世紀～ 18 世紀前半まで河道整備と一体に進められたが、18 世紀中葉～後葉には一時停滞し、19 世紀前葉に自然堤防のやや高い土地で再開されたことなどが明らかとなった。

註 1)（片山 1970）でも、「鈴見の松」の伝承から河口が枚方台地の先端付近にあったことを想定している。
2）条里型地割の分布は（枚方市史編纂委員会 1967）及び（大阪府 1961 年）を参照した。

3）古代・中世期の歴史的記述は（枚方市史編纂委員会 1972）によるところが大きい。
4）枚方市域の小字名は公図など、交野市域については（交野市史編纂委員会 1981）による。

参考文献

網伸也　2005 「淀川水系のミヤケ」『考古学ジャーナル』533　ニューサイエンス社
上原真人　2003 「初期瓦生産と屯倉制」『京都大学文学部研究紀要』42　京都大学文学部
大阪府　1961 『１：3000 地形図』
大阪府立狭山池博物館　2005 「尺治川の砂防堰堤と河床固工」『近代滔々』
交野市史編纂委員会　1981 『交野市史』民俗編　交野市
交野市教育委員会編　1992 『交野市史』考古編　交野市
交野市教育委員会編　1997 『森遺跡』Ⅴ
片山長三　1970 『枚方台地の形成とその前後』 枚方市
片山長三編　1963 『交野町史』 交野町役場
片山長三編　1970 『交野町史』改訂増補１
片山長三編　1971 『交野町史』改訂増補２
建設省近畿地建　1974 『淀川百年史』
国土地理院　1965 『１：25000 土地条件図　大阪東北部』
国土地理院　1983 『１：25000 土地条件図　大阪東北部』
千葉徳爾　1991 『増補改訂　はげ山の研究』 そしえて
東郷正美　2000 『微小地形による活断層判読』 古今書院
東郷正美・中野利典・峯元愛　2002 「生駒断層崖を開析する天野川の天井川形成期について」『活断層研究』21　活断層研究会
西田敏秀　2000 「枚方宿遺跡の概要－その成立期を中心に－」『枚方宿の陶磁器』枚方市教育委員会・（財）枚方市文化財研究調査会
枚方市史編纂委員会編　1967 『枚方市史』第１巻　枚方市役所
枚方市史編纂委員会編　1972 『枚方市史』第２巻　枚方市
枚方市史編纂委員会編　1977 『枚方市史』第３巻　枚方市
枚方市史編纂委員会編　1986 『枚方市史』第 12 巻　枚方市
真鍋成史　1997 「河内国・守部氏に関する基礎的考察−古墳時代鍛冶遺跡の実態解明に向けて−」『河内古文化研究論集』 和泉書院
宮地良典・田結庄良昭・寒川旭　2001 『大阪東北部地域の地質』 地質調査所
陸地測量部　1894 ～ 1899 『仮製地形図』 枚方・星田村・田辺村・高山村